

イングランドの学校教育制度の現状について
-イングランドの公立小学校、特別支援学校、公立中等
教育学校の訪問インタビューを通じて-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学資格課程事務室 公開日: 2021-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石川, 真理代 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/21890

〔論文〕

イングランドの学校教育制度の現状について —イングランドの公立小学校、特別支援学校、公立中等教育 学校の訪問インタビューを通じて—

石川 真理代（東京都立田園調布高等学校）

1 はじめに

2020年2月8日(土)から16日(日)にかけて私はイギリス国内の二つの都市（ダラム、ロンドン）で学校教育施設を訪問し、各地域の学校関係者の方々にインタビューを行うことで、各学校で目指している教育と学校教育の現状を学ぶ機会を得た。

2 義務教育段階におけるイングランドの教育課程

イングランドの義務教育段階における教育は、複数の学年にまたがるキー・ステージ(以下「KS」とする。)に分かれて構成されている(表1)。各主要ステージの終わりに、教師は児童・生徒の学習の状況について成績を出し評価を行う。KS1では英語(English)・算数(maths)・科学(science)の統一テストと教師による評価、KS2では、英語と数学の統一試験と教師の評価、科学の教師の評価、KS4の1年目に一部の生徒はGCSE(General Certificate of Secondary Education)と呼ばれる統一テスト、そしてKS4の2年目には、GCSEまたは他の国家資格を取得し、義務教育修了となる。義務教育修了後は大学受験を目指すシックス・フォーム[Sixth form(16~18歳)は year12、13]等に進学する生徒や、就労のための職業訓練を受ける生徒等、生徒は多様な進路を歩むことになる。

表1 キー・ステージ(KS)

Age	Year	Key stage	Assessment
3 to 4	Nursery	Early years	
4 to 5	Reception	Early years	Teacher assessments (there's also an optional assessment at the start of the year)
5 to 6	Year 1	KS1	Phonics screening check
6 to 7	Year 2	KS1	National tests and teacher assessments in English, maths and science
7 to 8	Year 3	KS2	
8 to 9	Year 4	KS2	
9 to 10	Year 5	KS2	
10 to 11	Year 6	KS2	National tests and teacher assessments in English and maths, and teacher assessments in science
11 to 12	Year 7	KS3	
12 to 13	Year 8	KS3	
13 to 14	Year 9	KS3	
14 to 15	Year 10	KS4	Some children take GCSEs
15 to 16	Year 11	KS4	Most children take GCSEs or other national qualifi

教育省(Department for Education)による「Key stages」と、Horsenden Primary Schoolの「Year Groups」を参照して、作成した。[(Retrieved from <https://www.gov.uk/national-curriculum>(accessed 2020.3.10), <https://www.horsenden.ealing.sch.uk/#>(accessed 2020.12.31)]

教育省(Department for Education)によるイギリスのナショナル・カリキュラム(The

National curriculum in England : NC) (2014)には、指導すべき知識を精選して明確に示しており、特に英語、数学、科学を重視している。この知識に連動したスキルを育成することを目指しており、スキルは各教科の中で提示されている。計算と数学(Numeracy and mathematics)、言語と識字(Language and literacy)が特に重視されており、各教科の中で育成される。しかし、具体的な学習指導や指導方法の例示は見られず、教師の裁量に任されている。

そのため、統一試験 GCSE 等の各試験団体が試験問題等とともに、各教科の試験に対応した学習活動例や指導方法、指導書、生徒用テキスト、指導配当時間等をウェブサイト上で提供している。教育省や自治体は各教科における学習指導・学習活動に関する支援を殆ど行わず、各教科団体や試験団体、研究団体等が学習指導方法や学習活動について方策を示している。

現在イングランド、ウェールズ、北アイルランドには次の五つの統一試験団体がある。①アセスメントと資格アライアンス[Assessment and Qualifications Alliance (AQA)]、②カリキュラム及び試験評価評議会[Council for Curriculum and Examinations Assessment (CCEA)]、③ピアソン・エデクセル(Pearson Edexcel)、④オックスフォード、ケンブリッジ、RSA 試験[Oxford, Cambridge and RSA Exams (OCR)]、⑤ウェールズ合同試験委員会[Welsh Joint Examinations Committee (WJEC)]である。

金子(2013)によると、「GCSE science の受験者全体に対し、各コース受験者が占める非常に大まかな割合は、AQA50%、OCR の 21CS25%、OCR の Gateway20%、Person Edexcel15%」であるという。そこで更に、私の専門である物理について「AQA A-level Physics Modified question paper Paper 1 June 2018」の試験問題を確認したところ、試験時間は 2 時間で、記述式問題と選択式問題(マークシート形式)の両方の問題により構成されていた。

イングランドでは総括的評価 (summative assessment) を重視し、統一試験等を通して児童・生徒の学力等を評価していることに特徴があるが、実際の試験問題の内容について調べると、記述式問題と選択式問題の問題構成のバランスを保たせた上で、各試験では形成的評価(formative assessment)を重視していると読み取れた。

また、2012 年 9 月から各学校における学年に関する情報、カリキュラムの内容及びカリキュラムに関連する追加情報を中心に、各学校ウェブサイト上でも一般に公開されており、誰でも閲覧できるよう整備されている[NC(2014), p. 5]。実際に今回視察を行った学校のウェブサイトを開覧すると、学校教育活動に関する様々な情報が掲載されていることが確認できる。

各学校で行われている教育活動について、教育省から独立した政府機関 (non-ministerial government department) として、英国教育水準局 (OfSTED:Office for Standards in Education) が、教育機関の監査 (学校監査及び地方教育部局監査) 及び、教育大臣への助言を行っている。英国教育水準局は、学校の教育内容、教師の学習指導及び生徒指導の状況、統一試験の結果、運動や文化活動における取組み、教

育課程の内容、ヘッド・ティーチャーらのリーダーシップの状況、抽出児童及び生徒からの聞き取り等様々な調査を行う。その結果を一般に公表することで、各学校における一層の教育改善を促すとのことである。

3 イングランドの義務教育段階における学校教育の現状

イギリスの教育は、地域や公立学校、私立学校等の校種によって異なり、大変複雑な仕組みになっている。そのため、各視察先については主にイングランドの学校教育の特徴と日本との違いを捉えるため、2歳から19歳までの児童・生徒の通う公立特別支援学校と、優れた進学実績を残している公立中等教育学校、そして、比較的規模が大きく外国をルーツにもつ児童が多く在籍しているため丁寧な指導体制を整えている公立小学校の3校について重点をおいて調査した。訪問調査を通じて明らかになったことを、学校方針、学校の様子、英国教育水準局の評価と、インタビュー調査を基にした、教師教育と学校改善に関する内容を中心に学校教育の現状を比較する。

① ダラム・トリニティ・スクール・アンド・スポーツ・カレッジ

(Durham Trinity School and Sports College)

ダラム市郊外にある公立の特別支援学校である(所在地 Dunholme Close, Aykley Heads, Durham, DH1 5WB)。運動技能の向上に繋がる教育活動を推進しており、スポーツを中心とした数々の賞を受賞している。自閉症または学習困難のある児童・生徒、2歳から19歳[Early years(Reception)(2~5歳), KS1~KS4(Year1~11)(5歳~16歳), EPU-Post16(Year12~14)(16~19歳)]までおよそ230名が在籍しており一部の児童・生徒は、医学的・身体的・感覚的・言語的または行動上の困難がみられる。校内職員は教員25名、その他職員として教育心理学者等の専門職職員が50名である。校外からの特別技能職員を含めると約130名となり、単純に計算すると児童・生徒1名に対し2名の職員が配置されている。実際には、教師と児童・生徒の割合は3対1を基本としているが、1対2となる場合もあるとのことである。早期(2歳)から行われる特別支援教育は、児童・生徒の成長や家庭教育にも重要な影響を与えるものとする。入学応募者数も定員を上回るとのことである。

全ての生徒に対して「教育ヘルスケアプラン (Education Health and Care Plan) (以下EHCPとする。)」が立てられている。EHCPは、個々の児童・生徒の教育と健康に関する支援計画書である。EHCPは毎年保護者とともに内容を更新して学校で管理している。そのため教師は日々の児童の成長を見取るとともに個人内の変化にも気付くよう、タブレット端末を用いて一人ひとりの児童の記録を丁寧に残していた。

(1) 学校方針

全ての児童・生徒のために最適な教育支援を提供すること、各児童・生徒の心理面に配慮した適切な支援を行うこと、児童・生徒が生涯に渡り生きるために必要な技能や知識を身に付けられること、児童・生徒の身体活動を重視した教育活動を行うこと、職員の専門性により児童・生徒の能力を十分に発揮させること、特別支援

教育に関わらず全ての児童・生徒が創造性を養える活動を行うこと、児童・生徒の成長を大切にすること、児童・生徒の生活保障を目指すこと、教職員は全ての児童・生徒の教育支援を十分に行い学校の発展に向けて活動すること、等幅広い方針を掲げている。学校ウェブサイト上には、アクセシビリティプラン(Accessibility Plan)をはじめ、平等に関する方針(Equality Policy)、プライバシーに関する注意事項(Privacy Notice)、学校方針及び関連文書保護指針(Safeguarding Policies and Related Documents)、保護者情報文書(Parent Information Documents)、特別支援教育に関する指針(SEND Policies)等の各種の指針や様式が掲載されており、ダウンロードして必要であれば学校事務局まで問い合わせられるようになっている。そして、個別の相談内容に対して、丁寧な支援体制を構築するための配慮がなされている。児童・生徒の支援方法に関する校内における情報共有や各家庭との綿密な連携は、日本の特別支援教育と多くの共通点がある。各種の情報の扱い方については、保護者情報文書等において予め規則を定めた上で厳重に管理しながら扱っている。

(2) 学校の様子

児童・生徒は、教科学習ができる教室の他に、ブラックライト等を使用して感覚を刺激したり感情を落ち着かせたりするための感覚調整室(Sensory Modulation Room)、水治療法のために活用されるプール(hydrotherapy pool)などの専門室及び施設がある。校庭では、オパール(OPAL¹)の教育を受けられる。児童・生徒が楽しく「遊び」ながら、学びを得るというオパールの教育方法には、教師の事前の授業計画及び対象児童・生徒の深い理解と、各遊具の意図的な使用方法によって児童・生徒の効果的な学びが成立するとして、学校ウェブサイト上には児童・生徒の野外活動の様子が紹介されている。学校は近隣3校を合併し、新設しているため、広い敷地をもつ。校庭は勾配のある芝生が校庭の端に向かって広がっており、校舎の近くには、風になびくと触れ合って音がなるとともに、隙間から向こう側の風景が透かして見える「視覚的に風を感じる遊具」など、随所に様々な「遊び」ができる遊具が配置され、充実した学びができるようになっている。また、教室のすぐ正面にはそのクラス専用の庭が配置されている。クラス専用の庭には専用の遊具や黒板が配置され、周囲は柵で囲われているため、特に多動傾向のある児童・生徒が安全に外遊びをできるよう配慮した校舎設計になっている。校舎内には、教科の専門教室に加えて、特別教室が複数設置されている。また、各教室の中には、教室内に試着室のような空間があり、個人用集中スペースとして使える。実際に中に入り、入口を閉じると遮光空間となる。また、教室前の廊下に配置した大型救急箱に常時薬を保

¹ OPAL (Outdoor Play and Learning Programme)

教師が直接教授するのではなく、児童・生徒が「遊び」を通じて、自らの学びと成長を促す教育手法。教師は児童・生徒の「遊び」の中に学びが存在するように意図的に教育プログラムを構築し、児童・生徒が「遊び」ながら、生きるために必要な学びを得られるようにしている教育手法である。

現在ダラム・トリニティ・スクール・アンド・スポーツ・カレッジでは、屋外での遊び(身体活動・社会化・協力・調整・回復力・創造性・想像力、及びそれらを楽しむ機会)を通じた教育プログラムを開発・実施している。 [<http://www.durhamtrinity.durham.sch.uk/about-us/opal/> (accessed 2020.2.6)]

管しておき、児童・生徒の必要に応じて適切な処置が行えるよう工夫している。

(3) 英国教育水準局による監査と学校改善

英国教育水準局による学校視察(School inspection)(2020)では4段階評価のうちの3番目に良い、「良い(good)」の評価結果となっている。そこで、前回の学校監査(2016)を調べると、ここでも全ての項目で「良い(good)」の評価を受けている。英国教育水準局による監査等においては、個々の教師の教科等に関する授業観察が行われ、教育課程の内容に関する調査、一部の児童・生徒へ面接が行われるとのことで、ヘッド・ティーチャーは個々の教師の専門性に関する教師教育も含めて、教育課程や児童・生徒の実際の指導の在り方に至るまで丁寧な学校経営が求められていると説明していた。学校改善として、ヘッド・ティーチャーは、今年度セミ・フォーマル・クラスを2019年9月から開設し、ここでは定められた教育課程の中で授業を進めるフォーマル・クラスの予備クラスといった位置付けで教育活動を進めているとのことである。児童・生徒はそれぞれパソコンを使った学習を行ったり、創作活動を行ったりするなど、各自が自由に遊びを通じた学習活動を進められるように担当教師が個別指導を行っていた。多くの生徒は卒業後に地元大学または特別な支援を受けられる学校に進学するとのことである。また、イギリスは学校毎に、特別な支援を必要とする児童・生徒の障害程度によって予算配分が異なるとともに、年度毎に学校(ヘッド・ティーチャーによる)裁量で自由に予算執行が行え、教育活動を展開できる。そのため、予算を人件費に重点的に充てて職員数を増やすことも可能であり、教育改善のための方針をヘッド・ティーチャーが打ち出す自由度が大きいとともに、その経営責任も大きい。しかし、実践の自由度が大きい一方で、英国教育水準局による監査による管理により完全な自由度が与えられているといえないのが実情であるとのことである。

② ダラム・ジョンストン・コンプリヘンシブ・スクール

(Durham Johnston Comprehensive School)

ダラム市にある男女共学の公立学校である(所在地 Crossgate Moor Durham DH1 4SU)。11歳から16歳まで[KS3(Year7~9)(11~14歳)、KS4(Year10, 11)(14~16歳)]の義務教育段階と、義務教育修了以降の2年間について、大学への進学準備を兼ねた学校であるシックス・フォーム[Sixth form(Year12, 13)(16~18歳)]を併設する中等教育学校(Comprehensive School)である。在籍生徒数はおよそ1700名の大規模公立中等教育学校である。

1901年にスーザン・ジョンストンの遺志により開校した。初年度は13名が入学し、男女共学のグラマー・スクールとして開校したが、その後テクニカル・スクール、ジョンソン・グラマー・テクニカル・スクール(The Johnston Grammar Technical School)等と時代の変遷をたどり、現在に至る。1950年からシックス・フォームを開設し、開設初年度は34名の男子生徒が入学したとある。

学校ウェブサイトには行動指針(Behaviour)、キャリア教育情報とガイダンス

(CEIAG)、学校運営(Charging and Remissions)、コンプライアンス(Complaints Procedures)、内部告発(Confidential Reporting Code (Whistleblowing))、家庭との連携(Home/School Partnership Agreement 2019-2020U)、安全保護(Safeguarding (Child Protection))、特別支援教育(SEND)、制服(Uniform Policy 2019-2020)等における各条項を詳細に公開している。特別支援教育コーディネータ(SENCO)の氏名も公開されインクルーシブ教育の充実が図られており、学校と家庭、地域との連携や生徒の学校生活について情報を一般に公開している。

(1) 学校方針

第3代ヘッド・ティーチャーによる5つのコアバリュー「5 core values」が次のように示されている。学術の卓越性「Academic Excellence」知識の習得「Acquiring Knowledge」社会正義「Social Justice」社会貢献「Public Service」世界に開かれた機会「Global Opportunities」。ここに示された内容は現在も引き継がれており、現ヘッド・ティーチャーはこの5つのコアバリューに新たな「問い」を付け加えている。理由は、教員研修等でこの言葉と「問い」を教師へ投げかけることによって、常に教師が学校教育の改善に意識を向けられるようにするためとのことである。

(2) 学校の様子

訪問時の在籍生徒総数 1666 名のうち、義務教育段階の生徒数は 1317 名である。この数字から推測すると、義務教育段階では各学年およそ 220 名、シックス・フォームでは各学年およそ 175 名である。昨年度の義務教育段階の入学志願者数 745 名であり、セントラルエリアの公立学校では第 1 位である。志願者の中には学区外からセントラルエリアへ転居して応募する家庭もある。今年度のシックス・フォームの入学募集人数は 50 名であることから、内部からの進学者はおよそ 125 名であると推測できる。生徒は上下黒のジャケットとパンツまたはスカートに白のシャツ、ネクタイを制服として着用し、言語の授業は 1 単位時間あたり 60 分となっている。生徒数が多いため、昼食の時間は 45 分間ずつ 2 回に分けることで校舎内の混雑を緩和している。時間割をずらしているためノーチャイムとなっている。また義務教育段階とシックス・フォームとで、使用する校舎が異なっている。シックス・フォームは大学受験に向けた学習環境が充実しているため、より教職員室に近い校舎設計になっている。進学指導に向けた生徒指導体制について、3 名の進学サポート教師が大学進学支援を行っており、生徒がユークラス(UCAS: University & College Admissions Service)²を通して応募する際に正しく申請できているかを含め、生徒の適性を把握して正しいコース、正しい大学を選択しているのかどうかを個別に評価しているとのことである。こういった丁寧な進学指導体制の下、これまで累計 84 名の生徒がオックスフォード大学へ進学するなど優れた進学実績がある。アメリカやヨーロッパの大学にも多くの生徒が進学をしているが、日本の大学への進学を希

² UCAS(University & College Admissions Service)はイギリスの大学へ入学するための総合出願機関であり、学士課程に入学する際の出願窓口となっている。 [https://www.ucas.com/ (accessed 2020.2.26)]

望する生徒はこれまでのところ存在しないとのことである。

(3) 授業の様子

今回の訪問では、昼食をはさんだ午前と午後に、語学の授業を中心とした授業参観の機会を得た。言語学習の教室では、スペイン語、フランス語、ドイツ語、中国語、ラテン語のいずれかの専門教室に分かれている。グラマー・スクールを前身としているため、現在も充実した語学授業を展開しているとのことである。イングランドの多くの生徒はフランス語またはドイツ語を履修しているが、この学校では、特にスペイン語の人气が高く、ラテン語を履修する生徒は少ないとのことである。しかし、どのクラスも30名ほどの生徒が学んでおり、室内はICT設備が充実していた。特にラテン語担当教師の意見として、ラテン語を履修する生徒は、歴史や他の言語との関連性、文化等に幅広く関心をもち、ラテン語の知識が役に立つと考えている生徒が多い傾向があると分析していた。各授業は、通常、試験の成績による習熟度別クラス編成によって学習指導が行われているため、成績によるクラス替えが定期的に行われているとのことである。イングランドでは相応の学力を得た上で、相応の教育を受けることが重要であるという教育に関する考え方が根底にあるため、習熟度別クラス編成から生じる生徒の心理的な圧力から生じる問題行動等の心配は全くないとのことである。更に各クラスでは、教師によって設定された指定席で、成績の近い生徒同士学び合えるように十分配慮して授業環境を整えている。

ところで、言語学習の主軸はこの10年間で文法的に正しい文章を書けるようになるとともに、文章を読んで論理的に考える力を育成することに移行しているとヘッド・ティーチャーは語っていた。また、ヘッド・ティーチャーによると、言語における授業内容の水準は、GCSEに対応させるために他教科と比較して際立って難化する傾向があり、他の教科間との授業の難易度調整が課題であるとのことである。

従来GCSE試験では、コースワークによる評価が知識よりも資質・能力を評価するものとして位置付けられてきていたが、現在試験改革により廃止・縮小の方向に向かっている。実際の試験問題を閲覧すると、記述式問題と選択式(マークシート方式)問題を併用し、客観的な評価が成されるように試験問題の内容が変化している。そのため、試験方法について、教師は常に最新の情報を集めて教科間で共有し、学習指導方法を工夫・改善しているとのことである。

(4) 英国教育水準局による監査と学校改善

英国教育水準局による監査は2015年に実施されており、全ての項目で最も良い評価(Outstanding 1)を得るとともに「This is an outstanding school.」と絶賛されている。特に「The head teacher, senior and middle leaders and governors provide outstanding leadership.」と評価を受けていることから、前ヘッド・ティーチャー等による学校改善の成果は大変大きかったものと判断できる。2015年と2011年の学校調査と比較すると、評価内容に変更があるとおり、調査内容は毎回異なるとのことである。そのため、学校の教育課題を抽出、解決するとともに、最新

の教育情報を得ながら、学校教育の課題を改善することが大変重要であることを知った。このような前ヘッド・ティーチャー等のリーダーシップによる教育改善は2015年の学校調査でも高く評価されている。そのため、現ヘッド・ティーチャーは教員研修を継続実施することで、教員の更なる指導力の向上を目指すとともに、職員集団全体としての指導力の向上を目指すことで、各生徒の才能を伸ばし、更に良い教育環境を築いている。特に現ヘッド・ティーチャーは、教員研修(Teachers' training)を勤務時間の中に位置付けてほぼ毎週、定期的実施することで、指導方法や教育方法等を改善するとともに、教科内と学校全体とで互いに相談し合える職場の雰囲気醸成することに努めている。具体的には、年間1165時間の勤務時間の中に、研修の時間として1回あたりおよそ90分間、年間39週の勤務のうち20週で研修を実施している。研修内容は、各教科で指導案を作成し、教科指導における専門性を向上させるために実施しているとのことである。ヘッド・ティーチャーは、特にチームワークを重視しており、個別のパフォーマンスよりも教科として誰にでも相談できる環境を作り、各教科で自由な研究協議が行えるように工夫をしているとのことである。今回の視察では、言語教師による研修協議会に参加をする機会を得た。ここでは、授業を互いに見せ合って指導方法を学ぶことは大切な研修であると認識しているとのことである。特に、語学教師には2名の初任者がおり、多くのベテラン教師の授業を参観し、直接指導を受ける機会があるとのことである。加えて、パフォーマンスマネージャーやアシスタントヘッド・ティーチャーらが初任者の授業を参観して定期的に指導を行っているとのことであり、学校内における教師同士の研修を中心とした教員研修が大変充実している。なお、過去にはベテラン教師も授業公開を行い、相互参観を行っていたが、現在は初任者による授業参観が中心となっている。外部における研修は、全体的な傾向として殆ど行われなくなっているそうであるが、言語教師には10日ほどの海外研修があるという。この他に、学校全体で集まって行われる研修が年間7回実施されており、リテラシー、コミュニケーション能力等に関する題材を扱っているとのことである。こういった教師研修や、進学指導における支援体制をはじめとした取組みが、一人ひとりの教師の指導力の向上に繋がり、教科内の結束が結ばれ、延いてはGCSE、GCE A-level³における生徒の優れた結果や、卓越した進学実績へと導いているものと判断できた。そのことが、地域保護者の良い評価にも繋がり、入学応募者数の多さにもあらわれ、学校全体で良い循環が構築され、英国教育水準局による高評価につながっているものと考えられる。

③ ホーセンデン・プライマリー・スクール (Horsenden Primary School)

ロンドンのイーリング地区にある大規模小学校である(所在地 Horsenden Lane North, Greenford, Middlesex, UB6 0PB)。3～5歳までの就学前教育[Nursery(3歳

³ GCE A-level(General Certificate of Education Advanced Level)とは、英国の大学入学資格として認められる資格である。

[<https://www.gov.uk/government/collections/new-a-level-and-as-level-qualifications-requirements-and-guidance> (accessed 2020.12.31)]

～4 歳)、Reception(Early years)(4 歳～5 歳)]と、5～11 歳までの初等教育(KS1～KS2(Year1～6)(5～11 歳)を担い、およそ 900 人の児童が在籍している。英語を母語としない児童がおよそ 70%在籍している。

(1) 学校方針

一人ひとりの児童が無限の可能性と希望をもち、学問的・個人的・社会的技能と能力を育成するための環境を構築していくこと。これは教育課程にも通じており、各児童の興味・関心を追究し、周囲のことに興味をもつことと、批判的思考力を養うことを目指している。そのため、各教科の他に各教科で学んだ内容を教科横断的に活用しながら学んでいくカリキュラム・エンリッチメント(Curriculum Enrichment)を通して、児童が研究主題を設定して探究する学習活動を推進している。児童は、こういった活動を通して創造性を養い、学校方針で掲げられた力を身に付ける。また、母語を英語としない児童が多く在籍しているため、フォニックス・プログラム(Read Write Inc. Phonics⁴)を実施している。この教育プログラムは、読書を通じて批判的思考力等の育成を目指している。特に児童が読書への親しみをもてるよう、1年生は6月に解読能力を評価するフォニックスの全国適格審査を受け、その結果を基に習熟度別クラス編成を実施する。また毎年5月には、2年生全員が読解と数学の試験を、6年生全員が読解、数学、文法、句読点、綴りの試験を受ける。

(2) 学校の様子

地域社会や保護者へ教育支援を提供する子どもセンターが併設されている。また、室内プールがあるため、年間を通じて水泳を実施できる環境が整っている。料理、音楽、宿泊を伴う活動や校外における訪問学習、放課後クラブなどを通じた特色ある取組みも行っている。

国際的な調査結果をもとにするとともに、脳科学の視点から児童の思考過程に沿った学習指導方法を開発している。児童の思考過程に着目した上で、他者との議論や体験の場を設定した授業形式を取り入れている。また、ビジブル・ラーニング(Visible Learning: 学習を「可視化」すること、目に見える学習)⁵を導入している。例として、「ウォーキング・ウォール(Working Wall)」と呼ばれる紙を教室の様々な場所に貼り、結論とその結論に至った理由を児童が書き込むことにより、児童の思考過程を可視化し、教師の評価に役立てている。別の例としては、授業終末に児童と教員が効果測定用紙に記述を行い、それをノートに貼り付けることを通じて授業の達成度を可視化し、評価することを行うことで、授業改善に役立てている。

⁴ Read Write Inc. Phonics とは、初等教育における読み書きに関する指導方法である。児童一人ひとりが文字を正しく綴れるようになることと、自己の考えを文章として記述することを通じて思考力を段階的に育成させることができるとしている。[<https://www.ruthmiskin.com/en/programmes/phonics/> (accessed 2020.2.26)]

⁵ Visible Learning とは、1981年にジョン・ハッティ教授が、教育成果に対する様々な要因や効果について、15年以上にわたって調査800を超えるメタ分析等を行い定量的測定による統合を実施したことを基に「目に見える学習」として発表した教師の学習指導に関する研究。トロント大学で博士号を取得した際の論文は、現在書籍として販売されている。

(3) 英国教育水準局による監査と学校改善

ヘッド・ティーチャーが求めている教師像は、児童へ教育的な関心があり、様々な教員研修を通じたフィードバックを受け入れる心もちあわせるとともに、協調性があり、教師として魅力的で共感的、教育に関する専門領域をもつ“学び続ける教師”であるという。また、英語、数学、ITに関する技能は必須とのことである。これは、ICTによる教師の業務負担や執務の電子化に対応しているものと判断できる。ところで、この10年間、教師を希望する者は減少傾向にあり教育環境は厳しい状況であるという。また、イギリスの教育課題は年を追うごとに厳しくなっており、イギリスの教員養成課程の内容だけで実際の教科指導や児童・生徒指導を行うには不十分であると考えているとのこと、新規採用者には学校独自に導入プログラム及び教育支援を行い、教員研修(Teachers' training)を行うとのことである。

教員研修では、事前にサポートスタッフとしてトレーニングする場合や、採用初年度にメンターとの定期的なミーティング(コーチング、メンタリング)を行い、更には授業参観や教材研究等の時間を作れるようにしているとのことである。また、充実した研修制度を推進するために採用初年度の教師は授業時数を大幅に減らしているとのことである。また、他校とも連携し、情報交換や交換研修等を行いながら、日々指導力を高めるとともに個人研究の機会も設定できるとのことである。

そして、このような研修を通じて、教師の指導力の向上を図りながら、学校改善につなげているとのことである。また、この学校は英国教育水準局による学校監査(2014)で、リーダーシップと管理、生徒の行動と安全、教育の質、生徒の達成、初期の準備など、どの項目でも「良い(good)」の評価を得ており、次の簡易監査(2018)でも「There is no change to the school's current overall effectiveness grade of good as a result of this inspection.」とある通り、前回と変わらず「良い(good)」の評価結果である。ヘッド・ティーチャーによると、現在イギリス国内では、特にブレグジット(Brexit)による国内政治の影響を大きく受けており、教育省に代わり、英国教育水準局が学校評価を通じた教育改善に力をいれているとのことである。そのため、評価規準が大きく変化しているとのこと、教育現場に及ぼす心理的な圧力・緊張感が大きいと語っていた。具体的には、英国教育水準局はこれまで統一試験の結果を重視する傾向があったとのことである。しかし、現在は特定の教科を重点的に教え、統一試験対策に重点を置くような教育課程から、個々の授業の教師の教科指導の状況に加え、学校全体でどのような教育方針を打ち出し教育活動を行うかも含めた、教育課程全体を評価の対象に位置付けているとのことである。ヘッド・ティーチャーのリーダーシップのもと、学校全体で指導力の向上を目指し、学校改善を進めることが求められている。また、ヘッド・ティーチャーによると、学校を変革する際に必要なことは、カリキュラム開発と教師教育の二点であると強調していた。そのためヘッド・ティーチャーは、校内における独自の教師教育を通じて、必要な指導力を身に付けられるように教員研修を構築しており、教員研修を通じて

教師集団全体の指導力の向上にも努めているとのことである。

4 イギリスの教育と日本の教育の比較を通じて

この10年で、イギリス国内における学校教育の環境が大きく変化したと今回インタビューを行った全ての学校のヘッド・ティーチャーは共通に語っていた。各学校のかかえている教育課題の改善に向け、校内教員研修を通じた指導力の向上を通じた学校改善は急務となっている。これは、NC(2014)の記載にある通り、2012から学校の教育情報をウェブサイト上に公開していることに伴う責任や、英国教育水準局による管理により、学校教育に求められている内容も増大していることにある。また、高等学校教師の立場から、イギリスの統一試験問題の変化をみると、日本の大学入学者選抜改革とは逆行した流れになっていることがインタビュー調査と実際の試験問題から明らかとなった。戦前より日本はイギリスの文化や教育を参考にしてきたという背景から推測すると、将来的には現在行われているイギリスの大学入学資格試験を参考に、再び新たな改革が行われる可能性もあるのかもしれないと考えた。引き続き、各国の目指す教育を学びながら、高等学校教師の立場から大学入学者選抜の意義と考え、高等学校学習指導要領(2018)で示された内容を読み込み、グローバル化する世の中で生徒が生きていくのに必要な資質能力とは何なのかを考えるとともに、教員自身の資質・能力の向上に資する活動を推進させていくことで、教育内容の一層の充実につながるように努めていく。

謝辞

今回は新型コロナウイルスが世界的な感染の拡がりを見せる時期と重なりましたが、日本からの視察を受け入れて下さり、貴重な機会を提供頂きました各学校関係者の皆様と、貴重な学びの環境を支えて下さった全ての皆様に深く感謝申し上げます。

参考資料・引用文献

Assessment and Qualifications Alliance Find past papers and mark schemes

<https://www.aqa.org.uk/find-past-papers-and-mark-schemes>

(accessed 2020.2.26)

A-level Physics Modified question paper Paper 1 June 2018

<https://filestore.aqa.org.uk/sample-papers-and-mark-schemes/2018/june/AQA-74081-QP-MQP18A4-JUN18.PDF> (accessed 2020.2.26)

British Council, UK exam reforms A briefing from the British Council, 2016

Council for the Curriculum, Examinations & Assessment GCSE Physics (2017)

Department for Education「Key stages」

<https://www.gov.uk/national-curriculum> (accessed 2020.3.10)

DURHAM JOHNSTON COMPREHENSIVE SCHOOL web site

<https://www.durhamjohnston.org.uk/> (accessed 2020.2.18)

Durham Trinity School and Sports College web site

<http://www.durhamtrinity.durham.sch.uk/about-us/opal/> (accessed 2020.2.6)
Horsenden Primary School web site
<https://www.horsenden.ealing.sch.uk/> (accessed 2020.2.6)
Ofsted , School report
Durham Trinity School & Sports College
<https://reports.ofsted.gov.uk/provider/25/114349> (accessed 2020.2.26)
学校視察(2020)<https://files.ofsted.gov.uk/v1/file/50148576> (accessed 2020.2.26)
監査結果(2016) <https://files.ofsted.gov.uk/v1/file/2552687> (accessed 2020.2.26)
Durham Johnston Comprehensive School
監査結果(2015)<https://files.ofsted.gov.uk/v1/file/2459829> (accessed 2020.2.26)
Horsenden Primary School
<https://reports.ofsted.gov.uk/provider/21/101901> (accessed 2020.2.26)
簡易検査(2018)<https://reports.ofsted.gov.uk/provider/21/101901> (accessed 2020.2.26)
監査結果(2014)<https://files.ofsted.gov.uk/v1/file/2430123> (accessed 2020.2.26)
Oxford, Cambridge and RSA Exams
<https://www.ocr.org.uk/qualifications/past-paper-finder/> (accessed 2020.2.26)
Past Papers & Mark Schemes
<https://ccea.org.uk/key-stage-4/gcse/subjects/gcse-physics-2017/past-papers-mark-schemes> (accessed 2020.2.26)
Pearson qualifications Exams Past papers
[https://qualifications.pearson.com/en/support/support-topics/exams/past-papers.html?Qualification-Family=A-Level&Qualification-Subject=Physics%20\(2015\)&Status=Pearson-UK:Status%2FLive&Specification-Code=Pearson-UK:Specification-Code%2Fall15-physics&Exam-Series=June-2018](https://qualifications.pearson.com/en/support/support-topics/exams/past-papers.html?Qualification-Family=A-Level&Qualification-Subject=Physics%20(2015)&Status=Pearson-UK:Status%2FLive&Specification-Code=Pearson-UK:Specification-Code%2Fall15-physics&Exam-Series=June-2018)
(accessed 2020.2.26)
Primary and Secondary School Admission Guide for Parents/Carers 2021 ,p.55
Read Write Inc. Phonics
<https://www.ruthmiskin.com/en/programmes/phonics/> (accessed 2020.2.26)
The national curriculum in England ,Framework document,December 2014
https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/381344/Master_final_national_curriculum_28_Nov.pdf
(accessed 2020.2.26)
Welsh Joint Examinations Committee (WJEC)
<https://www.eduqas.co.uk/qualifications/physics/as-a-level/>
(accessed 2020.2.26)
高等学校学習指導要領[2018(平成30)年3月告示]、東山書房、2019(平成31)年2月15日
金子真理子「カリキュラムの社会学序説」、『子ども社会研究』、No.19、2013、pp. 145-159
文部科学省「大学入学者選抜改革について」(accessed 2020.2.26)
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/koudai/detail/1397731.htm